

な窓から、社会の大きな矛盾を見ることは出来ないのだろうか。私達は一つ一つの小さな活動の積み重ねと、人々のつながりの広がりや町を変えていく力となり得ることを信頼したい。

《参考》

横浜愛泉ホーム

社会福祉事業法に基づき、老人、子どもクラブ、育児室、理容室、食堂等を完備した総合福祉センター（隣保館）として神奈川県が昭和三十七年に設置した。

運営は社会福祉法人神奈川県社会福祉

事業団があたっている。職員は館長以下

二五人で、管理課管理係・施設係、事業課地域福祉係・児童福祉係の二課四係。鉄筋コンクリート四階建、地下一階、延面積一、五〇三・二八㎡

昭和五十二年六月、神奈川県愛泉ホ

ムから、神奈川県横浜愛泉ホームと名称を変更し現在に至っている。

△南区・横浜愛泉ホーム職員▽

② 開かれた施設づくり 特別養護老人ホーム・芙蓉苑

鈴木恭子

一 はじめに

テーマを与えられた時に、私は非常に困った。そして、「開かれた」という意味を私は理解できません」と、原稿を依頼しに來られたK氏に噛みついた。なぜならば、開かれた表現から私が連想したのは、〃施設の地域開放〃であったし、その延長線上に浮かんできたのが〃施設の地域サーブイス〃だったからである。

そこで私は「ある研究会から『地域サーブイスについて発表してほしい』という依頼があった時に、私はお断りしたばかりなので」と話した。そして、その理由が次のようなものであることをつけ加えた。即ち、「私の勤務している施設では、積極的に地域のニーズを掘りおこして、地域サーブイスに取組んだ経験が無いから」「現在、実施しているのは『寝たきり老人一時入所事業』と『寝たきり老

人等入浴援護事業』だけであること」「その上、これらも〃市から委託されたから行う〃という消極的な姿勢でスタートしたこと」「前記のサーブイスは市内の特養ホームならどこでも実施していることであり、いずれも同一の実施要綱に基づいてしているのだから、結果的には似たりよったりで、私共の施設における地域サーブイスの特徴となるものは何もないはずで、これでは発表できる内容がひと

つも無いから駄目です」等々。「だから開かれた施設づくりも書けないと思えますので……」と私が話を続けようとしたら、K氏は突然私の言葉を遮った。「私は、『地域サーブイスについて書いて下さい』と言っているのではありませよ」と。それでも私にはまだ言いたいことが胸の中にあつたから、あわてて話を再開した。「私共の施設は特養ホームで、一五〇人の入所者を抱えた大世帯です。そ

- 一 はじめに
- 二 特別養護老人ホームの実態
- 三 特別養護老人ホームのボランティア
- 四 芙蓉苑におけるボランティアの推移
- 五 おわりに

の上六階まで居室が有るから、直接介護者を階別に配属しなければならぬ関係上、毎晩の夜勤者が六人も必要なので、日常の勤務の中では、介護者一人当たりの受持つ老人の数が多くなってしまふのです。『だから処遇が低下しては困る』というところで、職員一同が一生懸命に入所者に尽くすことで精一杯なのです。それでどうしても施設の内部にだけしか目がむけられず『外部までは関心が届きかねる』というのが本音です。その結果としてどうしても閉鎖的にならざるを得なかったのです。『施設の社会化』が叫ばれるようになってから随分たちましたが、この施設が閉鎖的にならざるを得なかったのには、それなりの理由があるわけで、そこへ『開かれた施設づくり』なんて無理な話ですわ』と。私があまり『閉鎖的』を繰り返したためらしく、K氏はクスリと笑われたようであった。そして、『貴女の話はもう終わりですか？』それからこちらからお尋ねします。『芙蓉苑はボランティアがとても多い』と聞いています。その人達が、どうやって苑に入れたのでしょうかね。閉ざされた玄関から中に入ることは不可能だと思いがすが、私しながら、『フーン』と唸って言葉の出来ない私に対して、さらに追討ちをかけてこられているのではないのですよ。開かれた

と言っているのがわかりませんか？』と。私は一瞬、ドキリとした。そしておずおずと口を開いた。「開かれたのは受身の助動詞れるのは連用形だから……」と口ごもっていたら、「まあ、それだけわかれば結構です。ではお任せします」ということになってしまった。私はあわてた。「待って下さい。共生の時代の方はわかりません。それから開かれたも少しわかったような気もします。でも、誰によつて開かれたのか、いつ開かれたのか、なぜ開かれたのか、その辺がわからないのですが……」と追いつがってみたら、「では、その辺をお書き下さい」と冷たくあしらわれてしまった。私は、そのあと何も言い出す勇気が出なかった。仕方がないから、私が老人ホームに勤務し始めてから現在に至るまでの間に、『私が見たり聞いたり感じたりしたこと』を振り返ってみることにした。特養ホームに勤め始めてから一カ月たった頃の私の日記の中に次のような記入があるのを見つけた。「まあ何という特異な小社会なんだろう。『施設外から来る人間は家族の代りをする職員のみ』と言つても過言ではない。施設が独特の方針を打ち出すと、職員一同それに従う。ホームの中で私が働いている間だけは、『家族的な、あなたか霧困気』という施設のモットーをかかげて精一杯努

めるから疑問を挟む余地がない。でも休日などに、自分が施設の外側に立って第三者的視点で眺めると納得のいかないことばかり。まるで鎖国時代の日本のようだ。『他の国では通用しないようなことが、日本の中だけでは堂々とまかり通つてしまふという不思議な時代』と歴史の授業で耳にしたのを思い出す。『世間では新幹線が走っているのに、老人ホームの中では、まだ陸蒸気が使われている。まるで『この世に陸蒸気しか存在しない』と信じている如くに……』とも。あの頃の印象が、私の胸の中に長い間へばりついて、私を苦しめたためか、自分なりに『施設は閉ざされている』とばかり思ってきたのに、第三者のK氏が『今は開かれてる』とおっしゃる。その上『現在、大勢の人が出入りされている』のは、まぎれもない事実である。これらを考え合わせたとき、『私はこれらをどう関連づけたら解明できるのか』がわからずに頭をかかえてしまった。そして、『ありのまま』を書く決心をした。私は毎日勤務していたはずなのに、私気がつかないうちに、いつの間にか『施設は開かれてしまつてた』のだから……。でも一番気になるのは、三つの疑問点（誰が。いつ。なぜ）のうちの第一番目である。私のような凡人の目には見えない透明人間のような人で、日本の神話に出てくるタ

ジカラオノミコトのような力持ちの人物によつて私の知らないうちに施設は開かれていたに違いない。だからその謎の人物を探してたいために、私はこれを書くことにした。

二——特別養護老人ホームの実態

現在、入所されていられる老人のほとんどは明治生まれの方である。だから公的機関に対しては、それらを全部ひっくるめて『御上』とおっしゃる。いつも『お上のお世話になるなんて本当に勿体ない』と語られる。そして何かを話すとそのあとに大底の方が「アリガタイことです」と付け加えられる。実際、特養ホームの中には、在宅老人が見たこともないような設備や器具等が揃っている。そして老人が暮らしやすいように、あらゆる空間が整備されている。また在宅老人を抱える家族では実現困難な濃厚な介護を寮母職がおこなっているし、老人達が一番心配していられる『健康』については医師や看護婦が尽力してくれる。その上、老人にとって食べ易いように調理された食品が、老人好みの味つけで食卓にのぼる。生活環境の条件だけをチェックしてみると「これで十分」といえそうない感じがするし、実際外部から施設見学に来られた方達が、これに類似した感想を

もらされる。施設内の生活が物質的に充実し、また量的にも満足感を得られつつあることは事実だが、その反面、内面的なむなしさや孤独感を訴える老人が数多く存在することも否めない実状である。もともと人間の内面的なものは、目に見えぬものだから、施設職員の一入である私が一方的に推測して、これを記すことは多くの危惧を伴うので、何気なく老人が口走った言葉とか呟き等を、メモしてあるままに列記してみたいと思う。老人は独語が多いものである。そして大底これは本音に近い。

「一体、いつになったら、うちの子(息子)は顔をみせてくれるんだろうね。いくら忙しいからって、これじゃアンマリひどいよ」

「せっかくお小使いを用意してるのに、孫がまだ来ないんだよ。もう袋が四つもたまってしまったんだ」(入所老人には年二回の慰問金が支給される。だから袋が四つもたまってしまったということは……)

「アアア、イヤダネー。どっちを向いても、アッチが痛いだのこっちがかゆいだの言ってるチヂババばかりなんだもんねー。これじゃ気が滅入っちゃまうよ。タマには珍しい顔でも見たいもんだよ。ネー」

「このマカナイサンは上手だよ。ウ

マイもんね食事がサ。だけどアタシだってタマには買物籠ぎせて、威勢のいい魚屋のニイサンの声をきいて買物してみたよ。それでサ、油がジュウジュウもえる中で、煙をバタバタ団扇であおぎたいよ。魚が手頃に焼き上がった頃に、ウチの亭主は帰ってきたもんだよ」

「ワシのところへ来る便りは、皆、友達が見た知らせばかりだ。あんまり多いから、知らせをもらっても、その人の顔が思い出せない時もあるよ。ワシが死んだ時に息子は通知を方々に出してくれんだろうか? それよりも、それを受取った方でワシの顔を思い出してくれるじやろうか? ナサケナイことだ」

「嫁っ子が『もっと綺麗な病院に入れてあげる』ってここへアタシを連れてきましたの。もう痛いところがないから家へ帰ってもいい頃だと思ってるんですけど……。えっ! もう帰れないの? どうしてですか? そんなことアタシ聞いてないですよ。一体だれがそんなことをきめたんでしょね。イイエ、アタシはきいてませんよ」

「ウチの娘が、あの時死ななければ、今頃は可愛い曾孫をダッコできたんだ。それなのに空襲の時にヤラレテさ。出来ることならオレが代りに死んでやりたかったよ」

「あのね、アタクシ貴女を好きです。

だから、アタクシが死んだら引出しの着物の間に隠してある日記をあげます。読んで下さいね。毎晩あれを書くよとホッとしますの。胸のあたりにつかえていたものが下って行ってしまったみたいで……。それでないとアタクシ眠れない時があるんですよ。隣の○○さんたら、ホントにイヤな人。あたしクヤシクテ……」

「オレは今度入ってきたあの寮母さん大好きだ! だから、おむつを取り替えてもらおうのがイヤだ。恥ずかしいなんてもんじゃ無い。まともにあの人の顔を見ることも出来ないよ。お願いだからシビンに変えてくれ。今すぐじゃ無理? そんならリハビリ頑張るからサ。頼むよ」

「いつもアタシの所へ会いに来てくれるお兄ちゃん(ポランティアの大学生)はやさしいネエ。どことなく九州にいる孫に似てるんだよ。だけど、あの人にもオパーチャンがいるんだろうね? あたしあの子のホントのオパーチャンになっちまいたいよ」

「僕はサ、お花習ってないけれど、あのお花の先生の着物はいつみてもイイねえ。死んだ女房もよくあんなセルの着物を着てたっけなあ」

「退苑ですか? 退苑デスカ? 隣の部屋で苑長さんがアタシのこと退苑だと言ってるよ。ええっ! アンタには聞こえないの? アタシにはよく聞こえる

よ。退苑させないで下さい。イヤダヨ退苑なんて! 家に帰ったらミンナにいじめられるもんネ! ねえアンタ、退苑じゃないよネ『退苑じゃない』って言ってよ!。一日のうちに何回も幻聴に悩まされながら、妄想の世界の中でこの老女は生きていられた。相手かまわず前記の言葉を繰り返された。職員誰かが側に行って彼女の耳許で「退苑じゃありませんよ。苑長さんもそんな話はしていませんよ」と静かに語りかけると、一瞬彼女の表情はバアッと明るくなった。「ワシ」とうなずくと、ニッコリと微笑まれた。その笑顔の美しいこと。「この方の赤ちゃんの時は多分こんなお顔だっただろう」と想像したくなるほど天真爛漫であった。そして先月、御本人の希望通り自宅へは帰られることなく静かに天国へ行かれた。やっと苦しみから解放されたように、安らかな死顔であった。その後一カ月以上経過した現在でも、時々私の耳の中には「退苑デスカ」という声が聞こえる。そして小声で「退苑じゃありませんよ」と呟く時、私の目の前は急に曇って何も見えなくなり、胸が痛くなってくるのをどうすることも出来ない。

三 特別養護老人ホームのポランティア

表 奉仕活動の内容分類表

A 間接奉仕	1	ゆかたほだき、おむつ縫製、おむつ組立て
	2	ベランダの清掃、外階段の掃除、屋上清掃
	3	草取り、芝生の手入れ、散水
	4	その他
B 直接奉仕	1	入所者との対話
	2	入所者との文通
	3	入所者の遊び相手(トランプ、ゲーム、碁、将棋等)
	4	クラブ活動の指導者
	5	クラブ活動の会場での補助者
	6	散策や日光浴の時の補助者
	7	散策や日光浴の時の入所者の話し相手
	8	施設内での行事に参加する入所者に対する補助
	8イ	行事参加への再勧誘
	8ロ	行事参加の準歩行者移動への補助
	8ハ	行事参加の入所者の着替えの補助
	8ニ	行事参加者のトイレゆき(入口迄)の歩行介助
	8ホ	行事参加者のエレベーター乗降に関する介助
	8ヘ	行事会場での参加時の安全確認の補助
	9	生活介助の中で、簡単な部分の補助
9イ	食事前のタオル配布	
9ロ	お茶の配布(食事前とおやつの前)	
9ハ	おやつ配布	
9ニ	入所者の食事前の準備の補助	
9ホ	食事介助の補助(食事介助は職員がする)	
9ヘ	入所者の食事後の後始末	
10	居室と、その周辺の清掃(床掃除、ガラス磨き等)	
11	入所者ベッドの床頭棚の清掃と整頓	
12	爪切り	
13	ボランティアの独自性や特技を生かした奉仕	
14	売店・ワゴンサービスの補助	
15	その他	

① ボランティア活動の分類

私共の施設においては、ボランティアの活動内容を、次の表の様に分類している。

- A、間接奉仕 入所者と直接に接触することはないが、作業の結果を通して間接的に奉仕することをさす。
- B、直接奉仕 入所者に直接に接触する範囲での奉仕をさす。

② ボランティアの個人的背景や、グループ構成員層別にみる活動内容

⑦ 主婦のグループ
老人の直接介護者の名称は、現在いろいろあるが、一番古くから使われているのが、『寮母』であるらしい。この職種の中に男性が入るようになってから『寮父』というのが誕生したり、両性を含めて『ヘルパー』と呼んだり『介護員』という名をつけたりしているようである。

要するに仕事の内容としては『母親のような仕事』であることは確かである。もっと具体的に記せば、家事的援助であり看護婦的援助であるともいえよう。だから専門主婦経験者や、育児の経験のある人が、特養ホームのボランティア活動には一番スムーズに入り易いのかも知れないし、活動を開始されたその日から、『すぐに役に立つ貴重な存在である』ともいえよう。だから奉仕活動の内容分類

表のうちの、B-13『ボランティアの独自性や特技を生かした奉仕』と、B-14の『クラブ活動の指導者』以外は全部していただくことが出来る。

④ 子供達

(ア) 乳児と幼児

奉仕にいらっしやる若いママ達は大抵次のようにおっしゃる。「小さい子は、やかましいから迷惑でしょう。だけど預ける所がないし困っちゃう」と。そんな時に私が申し上げるのは、こうである。

「芙蓉苑までの道中が大変でなければお連れになっていただけませんか？人間は誰でも『無いものネダリ』のようですね。『老人ホームに絶対存在しないものは何か』というと、それは赤ちゃんや幼い子供です。それから児童・生徒・学生の順になるでしょうが、お年寄り自分から年が離れば離れるほどお喜びになるみたい。理屈ぬきに嬉しいんでしようね」と。老人は、現在の自己が、精神的、肉体的に苦痛が多いために、過去の栄光(?)の中に逃避したがる傾向が強い。それから、不思議なことに誰しも楽しい思い出とか、幸せだった日々のごとはいつまでも覚えていますが、辛かった経験については忘れ去ってしまうものらしい。だから、老人の口癖は「昔はヨカッタ」の繰返しになるのである。純真無垢な赤子が泣き声をあげる時、八〇歳

の老女はいつの間にかタイムトンネルをくぐりぬけて、戦死したはずの息子が赤ちゃんとあった頃にもどってしまいうらしい。その時の自分は若く美しく、夫は遠方で働き者で幸せだ。「さあ、赤ちゃんにオッパイを飲ませなくちゃ」と思った時、老女はハッとして現実の世界にひきもどされたようであった。そして、ほんの一瞬ではあったけれども、幸せな世界の中に身を置くことが出来たのを非常に喜ばれた。翌日その老女に出会った時の表情は実に明るかった。開口一番「鈴木さん、あたし、きのうの夜、たすきがけで夢の中で赤ちゃんのオシメの洗濯しちゃって、とても忙しかったのよ。ホホホホ」と声高に話しかけて来られた。

なきや駄目じゃないか。オジイチャン」と、それぞれが、話のピントがはずれていることに気付かず、自分勝手な話に夢中になっている姿は実に微笑ましい。負けず嫌いの老人は、とうとう五、六歳位の悪童？ に逆戻りして、本気になってやり合ってしまった。その日の夕刻、六階の廊下で老人はボツリと私に語った。「ワシが遊んだ野原からも、あの富士山によく似た岩木山が見えたよ」と。西空に沈む寸前の夕日が、富士の美しいシルエットを作って、老人を再び思い出の世界の中に誘い込んでいたのかも知れない。

ホホホと声高に話しかけて来られた。際小僧をすりむいた腕白坊やの頭をなでながら九三歳の老人は語りかけた。ワシは戦争ごっこの時、いつも一方の大將だったよ。坊やもエラクなりなさいよ。何やって遊んでるの？ 今は。坊やは、すかさず答えた。「ボク、サッカーのキャプテンノ」「ホオノ、キャプテンか。たいしたものだ。試合は野原でやるのか？」「ちがうよ。練習場だよ」「ワシが戦ったのは草がボウボウ茂っている所でそこに味方と一緒に隠れていると、敵が攻めてくるから、いきなりトキの声をあげてやつつけるのさ」「そんなのはルール違反だよ。もっとフェアプレイにやら

あるかもしれない。でも、本人に自覚が無くとも、幼時体験が後にその人の人生観や社会観に大きく影響することは、保育の世界でも、しばしば実証されている。それから「子供が親の所有物である」という極日本人的な考え方が否定されているのも周知の通りである。だから、やっぱり私としては、乳児や幼児に對しても、一人前の人格(?)として接してゆきたいし、尊重してもゆきたいのである。幼稚園のカリキュラムに組込んで来所されるところもある(奉仕内容はB-1のみ)。

レゼントする。これらの子供達の多くは、団体に所属して来所することが多い。そして大底、多くの引率者がついて来られる。町内会の子供会や、宗教関係の日曜学校であったり、ガールスカウトやボーイスカウト等もある。それから『福祉教育の一環』としてカリキュラムの中に入れていられる学校もある。中学生も高学年になると老人と対話をしたり、クラブ活動に参加しているところ等を写真にとったり、文化祭などで、父母や友人達を相手に『福祉の重要性』を説く等、頼もしい感じのする子供達も出てくる。

(f) 児童と生徒(中学生のみ)

小学生の中でも、低学年の方は、どちらかというと幼児に近くて、B-1(対話)だけしか出来ない場合もある。

それから、小学校五年生の時から現在(中学校二年生)に至るまで、ずっと続いている自主グループがあるので御紹介したいと思う。

奉仕内容としては、次の通りである。

A-1のおむつ組立てのみ。A-3。

B-1、2、7、9のイ、ホ、へ、10のガラスみがき。

B-13に属するものとして、

⑥ プラスバンド部やバトン部の実技を芝

生で披露したあとで、そのままの服装で

道具を持って、ねたきり老人のところへ

対話にゆく。

⑦ 歌や踊りや芝居を舞台上で上演したあ

と、⑧と同じように居室へ対話にゆく。

⑨ 人形劇(指人形)を各階で上演する。

⑩ 工作や手芸の作品を持参して老人へブ

レゼントする。

それらの子供達の多くは、団体に所属して来所することが多い。そして大底、多くの引率者がついて来られる。町内会の子供会や、宗教関係の日曜学校であったり、ガールスカウトやボーイスカウト等もある。それから『福祉教育の一環』としてカリキュラムの中に入れていられる学校もある。中学生も高学年になると老人と対話をしたり、クラブ活動に参加しているところ等を写真にとったり、文化祭などで、父母や友人達を相手に『福祉の重要性』を説く等、頼もしい感じのする子供達も出てくる。

春休みもそろそろ終りに近づいたある日、可愛らしい女の子の声で電話が入った。「私、小学五年生です。お友達と一緒に老人ホームに行ってお手伝いしたいの。お休みの日でもいいですか?」と。「とにかく、施設の見学をしていただく」ということで、来所日時を約束した。約束の三〇分位前に、窓ごしに苑の入口の坂道に、二、三人の人影が見えた。「今の五年ってあんなに背が高いかな?」と半信半疑で私が窓をあけて外を見た時、人影は植込みの後側にかくれて

見えなくなった。そして定期になると、小柄な三人の女の子が玄關の受付に顔を揃えた。挨拶もきちんと出来て、なかなか礼儀正しい子供達であった。一通り施設案内をしたあとで、「まだ小学生だから、ここにいらっしゃることについてはお家の方に御相談して許可が出てからでない」と、苑の方でも受けませんよ。わかりましたか？」と念を押した。「ハイ」と声を揃えて返事をした時の少女の顔はとても可愛らしかったが、私は内心「大人でも少人数のグループは続き難いのに、こんなに年齢の低い子供達が果たしてボランティア活動を続けていられるのだろうか？」と思わざるを得なかった。それほど、この三人の少女の顔はあどけなく、頼りなく見えたのだった。少女達が帰ったあとで、私は三人の自宅へ電話を入れた。「苑までの道の途中で淋しく危険なところは無いだろうか」「今日は何時に帰宅できたか」「お家の方の意見はどんな風なのか」等々……。どの御母様も判で押した様に同じ答えをなさった。「苑への往復は、こちらが責任を持ちます。実は今日、先に偵察に行ったのは私です。子供達が相談して『どうしても行ってみたい』と言うので、『それなら、こちら(母親の方)は裏方をつとめよう』と三人で話し合ったのです。子供達の自主性を尊重して裏方を買って出

たこの母親達には敬意を表したい。その後三年半の間、母親達はこの姿勢を守り通した。少女達の成長は目覚ましいものがあったが、そのうしろに、この賢い母親のあったことを私は銘記したい。奉仕する内容は前に記した通りだが、そのほかに、少女たちは「六階のおばあちゃんに折り紙を覚えてくれるの」と語るようになった。私が、その入所者に尋ねてみたら「本当に可愛い女の子達ね。あたしの折紙はむずかしいから、なかなか覚えられないらしいのよ。でもママ気長にやるつもり」と語りながら目を細めていられた。「お上からお世話になってばかり……」と肩身のせまい思いを表現する時の表情とは程遠い、自信に満ちた語り方だったので私の方が驚いてしまった。これが同一人物の表情とは思えないほど明るく『与える者の側に自分が立つことが出来た喜び』を体中であらわしていられた様に感じた。「ああ、やっぱりそうだったのか」と、私はハタと膝を打った。「日常生活のすべてを与えられてばかりいる老人達は、口では『アリガタイ』を繰り返していられるが実は内心、とてもそれが心の重荷になって、なかなか晴れとした気分になれなかったのではなかるうか」と。「職員が、どんなに一生懸命に入所老人に尽くしても、老人の表情の中に、どこか暗さが感じられたの

は、もしかしたらこのへんに原因があったのかも知れない」とも私は思った。「自分が他人のために役に立つ存在である」と感じる時、その人は生きている張り合いを持つようである。この子供達は、「老人ホームに行ったら、こうしなさい」と母親達に教えられてはいなかった。ただ「お年寄りや、お仕事をしている人達に迷惑をかけないようにしなさい」ということだけを、きびしく教えられてきたという。六階のおばあちゃんが美しい折紙を折っているのをみつけて、子供らしい気持から「それをほしい」と持ちかけたようだ。初めての時は、それで終わったが、そのうちに「自分も作りたい」と思い始めたらしい。大人のもつ遠慮とか気兼ねとかを彼女達は知らない。そのナイーブな振舞いが、かたくなに閉ざされていた彼女の心を開いたに違いない。私は、この少女達に心からの感謝を捧げている。なぜならば、大人のできなかつたことを、彼女達は見事にやっていたのだから。

⑩高校生、大学生、社会人(青年層)

このうち高校生は、核家族化の進行により、老人に触れる機会も少なくなっていることなどから、社会や福祉の実習の場、体験学習の場として利用されている。これからも多いに利用してもらいたいと思っている。

また前記の三者は、「私共とほとんど変わらない」と言えそうである。「老人福祉の仕事をしたから今の職場を選んだ我々」と、『老人福祉施設でボランティア活動をしたいから来所された方々』というあたりで共通点があることを、年齢に比較して、今の大人たち(社会の中堅クラスの年齢の人をさす)よりも確固たる信念を持っていたり、きちんとした社会観に基づいて行動したりすることが多いように見受けられるからである。

ただ、施設の中の職員は現実の仕事に追いまわされて、どうしても視野が狭くなりがちであるのに対して、ボランティアの方達には、常に未来に向かって前進しようという姿勢が見られることは事実である。その意欲的な活動の中から、我々施設職員が学ばなければならぬことは多いように思う。

⑪老人

昨今、老人クラブの奉仕者が増加の傾向をたどり、また個人的に奉仕を希望される方も後を断たない。現役の時代を精一杯仕事に励まれ、その後も「社会のために尽くしたい」とおっしゃって下さる方達に対して、私は頭の下がる思いがする。それぞれの体力にふさわしい奉仕活動をしていただいているが、明治生まれの方のもつ独特の気骨に、我々職員の方が圧倒されることが多い。

活動内容は次の通りである。

A—1、3、B—4、13

因みに、芙蓉苑の民謡クラブの指導者は八二歳の男性であることをつけ加えた。

四——芙蓉苑における

ボランティアの推移

私がボランティア受入れ担当係になったのは、今から約四年半前のことである。その頃はまだグループの数が少なかったので、ボランティアの来所があれば「ああ、よかった。助かった。これで少しはオムツの山が片付く」と職員（洗濯場の）はホッと一息ついたものであった。「ボランティアさんは有難いもの、だから、先方の都合のよい日に来て下さればそれで十分」という感じで、芙蓉苑のボランティア活動は『ゆかたほどこ』と『おむつ組立て』と、『おむつ縫い』だけであった。そのほかの来訪者は『慰問』という形で、団体の場合はゾロゾロと廊下を並んで歩いていただき、入所老人と視線が会ったりすると、あわてて、「おじいちゃんお元気ですか？」「おばあちゃん御大切にネ」とおっしゃったりしてのを見かけた。その時の両者のバツの悪いこと。両方でそのきまわずさを隠すためにニッコリ微笑んだり、ニヤリと

したりなさる。私が「この奇妙な現象は一体なぜおこるのだろうか」と考えざるを得ないほど、こういう場面に出くわすことが多かったのである。人間同士が出会って視線が合った時、なぜお互いに「こんにちは」と気軽に挨拶を交えないのだろうか？ 山歩きをしていると、全く知らない人が逆方向から来た人と、バツタリ出会った時に両方から声をかけるようだ。「こんにちは！ 気をつけてネ、登りはきついよ」「こんにちは！ この坂道を下ると、きれいな湖に出ますよ、頑張ってください」と。話は違いますが、日本には昔から『お見合い』というのがある。その良し悪しは別として、「知らない人間同士が出会う」という点についてだけ考えてみれば類似点が無いとは言えないように思う。但し、私が言いたいのは、現代のことではなくて『昔のこと』をさしているのを御了承いただきたい。即ち、男尊女卑の時代に、『お見合い』の席では、女性は見られてばかり、いたらしい。その反対に、男性側はよく見るという優位にあったようだ。先程、何気なく男尊女卑と書いてしまったが、昔という語から自然に出てきてしまったもののように思う。そして何だか、お見合いの席で、ただただ見られている無言の女性の姿と、老人ホームで慰問に来訪された人々の視線の中で一方的に見られている無言の老

人の姿がダブッてきて私はやりきれない気持ちになってしまった。「人間は皆、平等なのに！」「イケナイ！ こんなことではいけないのだ」と、私は心の中で叫んだ。そして『二・特養ホームの実態』の中にその一部分を記したメモをとりはじめたのである。明治生まれのお年寄りも、余りにも辛い目に多くあすぎたためか、本音を吐くのを恐れていられるように私には感じとれたからであった。そして「多くの入所老人が求めていられるものは何か」を探しあてるとに夢中になった。でも、私の力だけではどうすることも出来ないほど、色々な問題がそれらの言葉の中には含まれていた。そこで私は考えた。「施設職員の私がやりたくても出来ないことを、誰ならば出来るのだろうか」と。その時フッと一人の女性の顔が胸に浮かんで来た。苑の近くに住む方で、ほんの少しでも時間が取れると、ヒラリと自転車に乗って奉仕にいらっしやって下さり「私でもお役に立つことがあったら、やらせて下さい。うまくやれるかどうかはわからないけれど、とにかくやってみたいのです」と言っただけの方である。「そうだ！ あの方に話をしてみよう」と私は思い立った。

でも、今まで前例のないことを実施するのには、随分勇気がいった。私が個人的には新しいことを始めて失敗して苑に迷惑をかけることが仮におきたとしても、私が退職して責任をとればよいが、今回はボランティアという施設外の方々への協力を仰がなければ実現できぬことなので、心配は大きかったように記憶している。「ボランティア活動の最重点を對話におこう」と私は決心した。それには間接奉仕の方を徐々に直接奉仕へと移行してゆかねばならない。その上、直接奉仕に適する方と適さない方があるように思えたので、悩みは深かった。「牛の歩みでよい。失敗するよりはよいと思わなければ……」と自分に言いかけながら実施に移した。五十二年度の後半に入ってからであった。五十三年度に入っからは、身体的に無理な方を除いて、ほとんどの方に直接奉仕を試みて、奉仕後に感想や意見を求めた。「とてもやり甲斐がある」「でも神経が疲れてやりきれない」等、さまざまなのがあった。その結果、直接奉仕者と間接奉仕者との分類が、或る程度は可能になった。五十四年度に入ったら、ボランティアの希望者の数が急に増加しはじめた。苑の周辺は大手の電鉄会社の分譲住宅地である。町会の役員の話によると「年間五〇世帯ずつ増加するので大変だ」とのことであった

が、『野原を切り開いたり、丘を切り崩したりして、どんな家が建つという横浜市の郊外の地域性』に依るものなのか、それともボランティア精神が横浜市民に滲透したためなのか、とにかく、時にはボランティアグループが二つも三つも重なって来所されたり、ボランティア希望者による施設見学が何人もあったりで、私だけでは対応しきれなくなり、私の席の近くの職員にも迷惑をかける羽目におちいってしまった。そこで五十四年度の終り頃から手を打ち始めて、定期奉仕者（毎月第○週目の○曜日のように毎月定まった日に来所される）と、不定期奉仕者（ボランティアの都合のよい日に来所されるので、その月によって来所される日が不定期になるのでこの名をつけた）とに分類した上、後者に対しては定期奉仕者への移行をお勧めした。これには約一年間かかった。この時点で、「私の都合のよい時に受入れてもらえないのなら止めるわ」という人がかなり出てきたことは、残念ながら真実であった。そこで私は「芙蓉苑だけが奉仕の場所ではありません。ほかにもボランティアさんを求めていらっしゃるには有るはずですから、あなたの御都合に合うとこ

ろをお探しになって奉仕活動をお続けただければ幸いです」と申し上げたが、さてその後のことが大変気がかりな毎日であった。こうして一旦減少したかに見えたグループの数が、また増加しはじめたのは五十五年度もなかば頃であった。「自分のよい日時と、自分の所属しているグループの奉仕する日時とがうまく一致しなかったから暫く奉仕を休んでみたが、やっぱり奉仕は続けたい。そんな話を近所の人にしてみたら、似たような立場の人が何人も集まったので、そこで少人数ながらグループを結成したから、何週目の何曜日の何時から何時までを奉仕希望します」という御申出の電話がかかってきた。私は驚きの中に、嬉しさがこみ上げてくるのを、どうすることも出来なかった。「本当に有難うございました」と言い終って受話器を置いた時、周囲の職員の中から笑い声がおきた。キョトンとしていた私に、朋輩が声をかけてくれた。「鈴木さんったら、電話の相手に最敬礼しているんですもの。何がそんなに有難かったの？」と。五十五年度の終り頃に、その時点でのグループの代表者に声をかけておいて、五十六年度の奉仕予定日の希望を提出していただいた。その

中で調整をしながら五十六年度を迎え、今年度は休日以外の全部の日がボランティア来訪日となった。「苑の都合に合わせるために無理を下さったグループが有るに違いない」と私は想像している。「きっと、担当者の私に苦しみを味あわせたくないために、黙って協力して下さっているのではある」とも。「ボランティアの皆さん有難う。全部の日にボランティアの来訪があるなんて素晴らしい。これは、私が受入れ担当になった時から夢だったのです」と大声で叫びたかった。そして今年度の目標は、一人でも多くの方に対話のできるボランティアになっていただけというよう、私自身が努力してゆくことである。ここまで思いが至った時、私はこの目標を誰かに話さずにはいられなかった。そして無意識のうちに私はダイヤルをまわしていた。その相手は、勿論ボランティアさんである。しかも『自転車に乗って苑にかけつけて下さったあの方に』である。その時、再び彼女は言われた。「私でもお役に立つようだったら協力させて下さいね。うまくやれるかどうかはわからないけれども、とにかくやってみましょう」と。

五 おわりに

再びテーマに戻りたい。なぜならば、『はじめに』の欄で、『私が探し求めていた人』に会えたからである。そして三つの疑問の回答も記したい。私の勤務する施設を社会にむかって開いたのは、残念ながら施設職員ではなかった。

芙蓉苑を開かれた施設に委寄せたのはボランティアさん達であった。それも、職員が気付かぬほどの静かな足音で、苑の門を開いてくれたのだ。そして最後に残る「なぜ」という疑問への回答を記したい。

それは「対話をしたことにより、職員以上にお年寄りの声を理解したボランティアが、老人の求めているものを探してたから」ということになる。私はこれからもボランティアから多くのことを学ぶであろうし、また、それを期待している。施設の外の人の手によって開かれた門をぐりぬけて、施設の中の人間も、外の人間も共に手をたずさえて幸せに生きてゆきたい。

〈特別養護老人ホーム・社会福祉法人
同慶会「芙蓉苑」生活指導員〉